高知で暮らしてみる

公文　俊平

傘寿を目前にして、余生をどう送ろうかと考えているうちに、故郷に帰ってみたくなった。といっても妻は東北出身なので、言葉を含めて適応がむずかしいかもしれない。で、とりあえず試しにしばらく住んでみることにした。

従兄弟や伊野部さんのつてで不動産屋をまわり、農人町に、ここならという賃貸しマンションを見つけた。茶園場電停から三分、堀川沿いの11階だての10階である。堀川ごしに目の前にホテル日航があり、その少し西には高級マンションのトップワンがある。これならいい目印になるので、道に迷うこともないだろう。目の下は桜並木である。西日が強いが、眺望は悪くない。筆山と鏡川、そして堀川がよく見える。場所柄津波が心配だが、10階ならなんとかなるだろう。建物は免震構造だというので少し気が楽だ。

ということで、当分はここに住もうと決心して入居契約をすませ、昨年の11月にまず一カ月ほど「試住」(こんな日本語あるのかな?)した後、今年の二月から、

今回は四～五カ月の滞在を目標にやってきた。といってもまだ完全に引退したわけではないので、時々は東京に戻らなくてはならず、旅費の工面に頭が痛いが、それはやむをえないコストだと割り切ることにする。

三つの実験

高知の生活では、三つの実験を試みている。車はもたず、固定電話なし、有線インターネットなしである。さらに、最初の一カ月は、冷蔵庫も洗濯機もない暮らしになった。三世代同居することになって自宅のリフォームをしている妹が、余分になる冷蔵庫と洗濯機を三月後半になったら廻してくれるというので、それまでは毎日氷を買い、三日おきにコインランドリーまででかけることでしのごうというわけ。ところが、リフォームの進行が遅れて、さらにもう一カ月待ってくれといわれて、さすがに妻が悲鳴をあげ、冷蔵庫だけでも当面小さなのをレンタルすることにした。

二月九日の到着早々、二人とも大風邪を引いて寝込んでしまったが、十日ほどでなんとかなんとか元気を回復。外出できるようになったところで、田所の久ちゃんの勧めで、肺炎球菌の予防接種をする気になり、土佐山田町の田所医院まで

でかける。往復は高知駅からの気動車。六十五年前の汽車通の時代を懐かしく回想。当時は蒸気機関車に連結された客車で、片道３０分かかった。その間に、友達に借りた雑誌や本を読むのが楽しみだった。３０分以内に読み切らなくてはならないので、速読のいい練習になったものだった。

土佐山田駅に降り立つ。ホームから階段を上って下りて改札口に向うところまでは、昔のままのように見えた。駅前の様子が少し変わっている。東側に大きな駐車スペースができていた。駅から田所医院までは5分もかからないはずだが、たちまち迷ってしまった。通りすがりの若者に場所を尋ねてみたが首を傾げている。そんな医院は聞いたこともないという。諦めていったん駅にもどろうと右折したところで、先に左折して進んでいた若者が、大きな声で「ありましたっ」と叫ぶ。道路脇の別の医院の大きな看板の下に、「田所内科」と書いた看板が小さくかかっていたのを見つけてくれたのだ。

田所医院は、大通りを外れた町中にひっそりたっていた。入り口にも何の表示もない。なんでなのと尋ねてみたら、先代の父君が「医者は宣伝などするものではない」という信念の持ち主で、いまもその伝統を頑固に守っているそうだ。

清々しい。

久ちゃんがいうには、このあたりはいまこそ家が立ち並んでいるが、後十年もすれば、ほとんど全部なくなってしまうそうだ。跡継ぎがいないまま、極端な高齢化が進んでいるためだという。このあたりは津波の心配もない高台で、交通の便もそんなに悪くないのに残念なことだ。三キロほど先には高知工科大学もある。高知市内の生活を堪能した後は、やっぱりこちらに移ってきてもいいかなとふと思った。実は、最初この町でも物件を探してもらったのだが、なかなかこれはというものがなかったのだ。

それはともかく、このところ毎日、買い物かたがた徒歩で市内を探検している。万歩計をみると、一日８０００歩から１００００歩歩いている。今では歩くのがすっかり苦にならなくなった。

もっとも、徒歩生活にすぐ慣れたわけではない。十一月にまずきたときには、二度激しく転んで手をすりむいたり膝を痛めたりした。最初は、数百メートル離れたコンビニでビールなどを買って帰るときだった。堀川沿いの桜並木の下を歩いていたら、古くなった石畳の石がもりあがっていたのに気がつかず――視力が弱い上に、バリラックスの遠近両用レンズだと、足元がひどく見えにくい――たち

まち躓いてしたたか転んでしまった。ビールの缶も破裂まではしなかったが、かなり派手にへこんでしまった。（余談だが、その後この石畳道では修復工事が行なわれていて、道が封鎖されている。花見時期に間に合わせるつもりだなと感心して、工事の人夫さんにいつごろ完了の予定ですかと尋ねると「さあ、僕にはわかりません」とそっけない返事。だが、道の終りのところまでいくと三月二十五日完了予定という立て札がたっていた。桜の開花予定日がこのあたりでは十六日前後だそうなので、これでは花見には間に合わない。なんたる役所仕事かとあきれ返った。）

二度目は、夜暗くなってから茶園場商店街を抜けて京橋商店街に出ようとしていた時。途中にかかっていた橋の歩道を歩いていたのだが、街灯がなかったせいもあり、歩道から足を踏み外してしまった。歩道との段差が大きかったために、下ろした足が空を切り、そのままうつ伏せに倒れ込んだのである。咄嗟になんとか手をついて顔面を強打するのはまぬがれたけれど、またまた手のひらを擦りむいて血だらけになり、そのまま引っ返す羽目にあいなった。さすがにそれからは注意深く歩くようになり、今回は転ぶこともなしにすんでいる。

農人町の自宅から、はりまや橋商店街、京橋商店街を抜けて帯屋町の入り口までは１３００歩ほどである。そこから大橋通りのひろめ市場あたりまで、ほとんど毎日「帯ぶら」をしている。帯屋町のアーケードでは、中の橋通りから大橋通りにかけての北側のほとんどを「ダイエー」が占めていたのが、今は撤退したために板囲いだけが残っているのがなんとも痛々しい。しかしそれを別にすれば、帯屋町は「シャッター通り」化はしていない。人通りもけっこう多い。「ちんちん電車」と「アーケード商店街」が健在なのは、高知市の特筆すべきセリングポイントだと思う。ただし、一つ情けないのは、このアーケードの中を自転車ですいすいと走り抜けていく連中、とりわけ中高生が多いことだ。自転車走行は禁止されていますという表示がでているのに、平気で無視している。まあ人通りが多くない時間帯だと、それほどの実害はないので、あまり目くじらはたてないことにするか。

今のところ、われわれ夫婦の最大のテーマは、高知の市めぐりである。追手筋の日曜市が最大だが、火曜日には上町で、木曜日には県庁前で、金曜日にははりまや橋商店街で、それぞれ市がたつ。(以前は桟橋通りに水曜市もあったそうだが、訪ねてみるといまはなくなっていた。)冷蔵庫がないので一度に大量買いはできな

いが、逆にその分毎日の買い物が楽しめる。とりわけ嬉しいのが、新鮮な野菜が安く買えること。金曜市にでていた、一抱えもある白菜には２００円の値札がついていた。「あれでたった２００!」しかし、他にもいろいろと買い物をした後だったので、さすがに持って帰れそうもなく諦めたが、その雄姿は、いまでも目に焼きついている。

市で見つけて妻がとりわけ重宝しているのが古い鰹節を砕いて粉末にした「枯木節」である。うま味の凝縮だ。同じようなものを大橋通りの魚屋で買ったらまるで味がしなかったそうだ。

昔ながらの硬めの豆腐もいい。噛んで食べると、滋味が口中に広がる。しかし一番感嘆したのは一昨日の夕餉に妻がだしてきたおひたしだった。実に柔らかくジューシーで、優雅な味がする。しかし何なのかわからない。妻に尋ねたらほうれんそうだという。しかし、まったくそんな感じがしない。味はイクストラバージンのオリーブ油で整えたそうだが、それも効果的だったのだろう。

東北生まれの妻は、漬け物なしには生きて行けない。外食の時でも、お新香の山盛りを注文してぺろりと平らげる。そんな妻にとっては、土佐の食文化には漬

け物が抜けているようにみえるらしい。確かに、漬け物が単品でメニューに載っている店は少ないようだ。市には各種の漬け物が並んでいるが、いろいろ試してみてもなかなかこれというものに行き当たらない。とりわけ物足りないのが――これは私もまったく同感なのだが――白菜で、あの適度に発酵した独特の味わいがない。要するに「スカ」なのである。まあ、良く探せば期待通りのものがみつかるかもしれないが、平均的には落第といわざるを得ない。

逆に嬉しい期待外れが馬刺しだった。最初、はりまや橋の馬肉店で春野産の冷凍ものの馬刺しを見つけ、試しに買って帰ったのだが、これがなかなかの上物で、私がこれまで知っている松本や熊本の馬刺しに負けるとも劣らぬというか、それ以上だった。

だが、料理店ででてきた生の馬刺しは、さらにそれ以上だった。われわれがちょくちょくでかける居酒屋に、昔の新宿西口ガード下の飲み屋を思い出させる「にこみちゃん」という店があるが、そこで毎木曜日だけに供される馬刺しは凄い。さらに凄いのが、馬の「生レバ」である。

牛や豚の生レバが容易には食べられなくなった現在、「生レバ」はそれだけで稀少価値があるが、ここの馬レバは生臭みがまったくなく、プルプルコリコリし

ていて食感もすこぶるいい。などと感心していたら、数日前に堀詰めの「御畳瀬」という居酒屋でたこれも春野産の馬刺しは、さらにそれ以上だった。

ちなみに、この店で鯖の刺身を注文したところ、なんと付け合わせに鯖の白子がでてきた（写真右下）。これがまた、ふぐやたらの白子とはまるで違って、プルプルコリコリした絶妙の味だった。

三月上旬は、「高知のおきゃく」の時期でもあり、三翠園でのよさこい鳴子踊り、中央公園での県内各地のうまいもの競べや、フレンチ／イタリアンの店のシェフによるアペリティフ競べなど、いろいろ催し物が楽しめた。なかでもすばらしかったのが、「司」本店が企画した「おきゃく」。メーンは土佐の食材を使った懐石料理で、酒は飲み放題。この懐石料理で妻は土佐料理のレベルを見直したそうだが、なんといっても当夜の圧巻は、アトラクションとしてわざわざ徳島から招聘してきた阿波踊りチームの演技だった。

出演者はわずか四人だったが、リーダーの福島俊治氏は、阿波踊りの指導者と

して有名な人物だそうで、その三味線はまさに神技。「渦の会」の踊り子さんの踊りも、軽やかさと優雅さに息を呑むばかり。伝統芸術の重さと深さをしみじみと感じさせてもらい、「踊る阿呆に見る阿呆」と思い込んでいた阿波踊りへの認識が一変した。

市内観光だけでもつまらないだろうといって、弟夫婦が、いまがちょうど見頃だという須崎の桑田山（そうだやま）の雪割桜見物に連れていってくれた。この桜は、梅とほぼ同じころにピンク色の濃い花を咲かせる。ちょうど、菜の花も満開で、ピンクと黄色の対照がすばらしかった。（写真左下）

そこから久礼まで足をのばし、地元でとれた魚を中心に販売している「大正町市場」と、久礼湾を一望に収める「黒潮市場」を見物して帰って来た。

大正町市場は、大正年間に火災で消失したものを大正天皇の御下賜金３５０円をもとにして再建し、地名も「大正町」とあらためて今日にいたっているそうだ。

久礼といえば、私が子供のころは土讃線は久礼が終点だった。国民学校二年生の時に、中村に長期出張していた父に呼ばれて中村まででかけたことがある。朝五時に中島町の家をでて、汽車で久礼まで行き、後はバスでくねくねした山道を上ったり下ったりして、バス酔いに苦しみながらやっと終点にたどりついたときにはもう日がとっぷり暮れていたことを思い出す。いまなら高知から中村までは車で二時間と少しで行ってしまうのだが。

須崎へのドライブに刺激されたのか、今度は妻が自分も運転してみたいと言い出した。わが家では、私が緑内障で視野が狭くなってからは、もっぱら妻がショーファー役をしてきた。そもそもドライブが大好きな性格なのである。妻は、家の近くに時間貸しの安いレンタカーの店を見つけてきて、一度どこかに行ってみようという。それならということで、十二時間のレンタカーをして、土佐山嫁石の森梅園まで梅見にでかけることにした。

カーナビにはiPhoneのGoogle Mapsが十分役にたってくれた。もっともiPhoneは、GPSを使うとみるみる電池がなくなるのが難なのだが、この弱点は、ライター口に差し込めるUSB充電装置とケーブルをつけることで解消し、とても快適にカーナビが使えた。しかし、しばらく走ると、道路がひどく狭くなり、すれ違い

もできなくなっていささか肝を冷やしたが、それでも一時間ほどでなんとか無事に梅園の入り口に到着した。

駐車場は、そこからさらに、なんとも狭い坂道を下った先にあった。誘導係の指図でどうにかそこに車を入れて降り立ち、山腹を登っていったところ、眼前に満開の梅が姿を現した。全部で千二百本がぎっしりと植わっている梅林のなかに足を踏み入れると、梅のかぐわしい香りがあたりに立ち込め、うっとりさせられた。

（この日の経験に味をしめた妻は、軽でもいいからやっぱり一台ほしいわねと言い始めている。車なしの暮らしはどうやら長続きしないかもしれない。）

固定電話は、なくてもさほど問題はない。冷蔵庫のレンタルの注文にFAXを送る必要が生じたが、これはネットからダウンロードした注文用紙をプリンアウトして記入したものを、帯屋町のコンビニからFAXすることで対応した。

問題は電話自体で、私の場合iPhoneをすぐどこかに置き忘れる。おまけに耳が遠いので、ポケットに入れていても着信音に気づかないことが間々ある。ケータイと共に生活する習慣が身についていないのである。わが家ではいま、DVDで韓流時代劇を見るのは卒業して、アップル・テレビとhulu（月額980円でたくさん

の番組が見放題のアプリ）で米国のテレビ番組を楽しんでいる。Heroes のシリーズは見終わって、Fringe にかかったところだが、登場人物たちが実に自然にというか当然のことのようにケータイを使いこなしているのに驚かされる。Fringe の主人公の捜査官たちは、被疑者の家に突入したり、逮捕した被疑者を尋問したりしている最中でも、かかってきた電話には必ず出るのである。ケータイが生活に融け込んでいる程度は、米国の方が日本よりも高いのか。それとも私が時代後れなのだろうかと首を傾げてしまう。

ややこしいのはモバイル・インターネットだ。高知市でも WIMAX が使えることがわかったので、私と妻のノート PC は、WIMAX 内蔵のものにした。それ以外に、WIMAX ルーターの SS10 も購入した。デスクトップ PC と、iPad、NEXUS7、アップル・テレビなどは、これを使ってインターネットに接続している(SS10 の場合は、同時に十台まで接続可能なのである)。メールや検索にはそれでとくに支障はないが、ブロードバンドとなると通信速度の遅さがこたえる。ストリームで番組をみていると、バッファリングのための中断がしょっちゅう起こる。Evernote その他のアプリで、クラウドとの間にデータのやりとりが頻繁に必要とされるものは、これまたしょっちゅう「応答なし」状態になって待たされる。

そこで通信速度を測定してみたら、なんと下りで 1.3 ー 1.4Mbps、上りにいたっては 200kbps しかでていない。（朝のうちだとその三倍くらいはでるのだが。）これではブロードバンドとはとうてい言えない。このままでは、一時しのぎにはなっても、本格的に仕事をしようとすると能率のあがらないことおびただしい。まあそこまであくせくしなくても、どうせ余生を送るだけだからいいではないかとも思ってみるが、残り少ない人生の時間だからこそ、ネットもさくさくと使いたいではないかと思いなおしたり、悩ましいところだ。昨夜などとくにひどく、hulu はほとんどつながらなかった。そこにタイミングよく、光インターネットの導入は完了していますよというちらしが入ってきた。無理な実験はやめた方がいいのかもしれない。

六十年ぶりのふるさと

高知で暮すのは、高校を卒業して東京にでて以来だから、ちょうど 60 年ぶりになる。しかし、町の基本的なたたずまいはそれほど変わっていない。ちんちん電車も昔のようにのんびりと走っている。茶園場からだとたいていのところは容易に歩いて行ける。むしろ驚いたのは、これまでもっていた高知のイメージが、現実とはかなりかけはなれているのに気づいたときだった。たとえば私のイメージ

のなかでは、高知市は東西南北それぞれ一直線に伸びている土電の路線を中心軸としている。市内だけでなく東西の後免-伊野間もほぼ直線である。

ところが今度歩いてみて気がついたのは、それがおよそ間違ったイメージだったということだ。

そもそも茶園場から電車で二駅分のはりまや橋にかけてでさえ、道路はかなり東に曲がっているではないか。もっと驚いたのは、母校を訪ねるべく九反田橋を渡って南下したら、ほどなく桟橋通りに突き当たりそうになったことだった。そのさらに東の土佐道路(昔はなかった)を南に行くと、これまた桟橋通りと交差してしまう。並行に走っているはずの道路がどうして交差するのか。答えは簡単で、高知駅から南にまっすぐ行くとはりまや橋だが、そこからさらに南に進んで潮江橋を渡るあたりから、桟橋通りは30°近く東に斜行しているのだ。

中学一年生のころ、汽車通だった私は毎日高知駅と潮江を往復していた。そして潮江橋を渡った後は、左に逸れる桟橋通りを離れて直進していたはずだ。

それなのにどうして桟橋通りをまっすぐな道だと思い込んでしまったのか。いまあらためて思うと不思議でならない。きっと、私の記憶がものごとをより単純

化する方向に書き換えられてしまったのだろう。

高知には、ホテルやマンションを除けば、高層ビルはいまだにほとんどない。自動車道路も、だいぶん整備されてきてはいるものの、他県――たとえば私がよく通っていた山形県の鶴岡市に比べるとまったく貧弱である。まあ、だからその分「郊外化」の被害に逢うことも少なくてすんでいる。少子化・高齢化と人口減少が一貫して進んでいる高知で、鶴岡市のようにいたるところに大型の郊外ショッピングセンターを作ろうものなら、悲惨な未来が待っていることは疑いない。（鶴岡でも、すでにその傾向は見え始めている。）

もっともそれと同時に、くるま社会化に対応して、くるまでのアクセスを前提した「産直」店がいたるところにできている。無料で配布されている産直マップをみると、県内に１０００数百店がひしめいている。こういう店をうまく利用しようと思えば、やっぱりくるまなしというわけにはいかないのかもしれない。

といった具合で、実験の方は、固定電話以外はほとんど失敗に終わったようだが、それはそれとして高知の暮らしにはけっこう満足している。後は、年金生活を補完するための収入の途を少しでもみつけることくらいか。